

# 対中河幹子著述文献目録

——付・中河幹子主要編著書解題——

荻 野 恭 茂

## 一、はじめに

歌人・中河幹子の研究は、中河幹子が土岐善磨、五島美代子等につぐ、紫綬褒章、受賞歌人であるにもかかわらず、その弟子筋に研究者の稀薄なことも手伝ってか、学界においても日が浅く、これという研究史のごときものも見当らない。そこでここに、遠い将来の研究史の資料ともなるべき「対中河幹子著述文献目録」を作成してみた。これは自註の類をも含めて中河幹子を対象として記されたもののみによって構成されているものであって、現時点における広い意味での研究の限界線の展望とも言える。中河幹子自身による諸々の著作については、本稿と平行して上梓される予定の『梶山女学園大学研究論集』第12号上の拙稿「歌人中河幹子年譜」の中に組み込むことにした。併覧いただければ幸である。また、本目録に関し、筆者の視野の狭さによって齎らされているであろう遺漏等につき御叱正をたまわりたい。

尚、付録的な作業として、本目録に登場する中河幹子の主要編著・四点につきその解題を記した。

## 二、対中河幹子著述文献目録

- (1) 「中河幹子」(『昭和歌人名鑑』(昭4・12、紅玉堂書店))
- (2) 「中河幹子」(『短歌研究』第七号—「短歌講座第八卷執筆者小伝」(昭7・4 改造社))
- (3) 「中河幹子」—「女流歌壇展望」中、阿部静枝筆。(『短歌声調』創刊号(昭25・1、短歌声調社))
- (4) 「中河幹子」—木村捨録筆。(『近代短歌辞典』(昭31・1、新興出版社))
- (5) 「中河幹子」—橋本徳寿筆。(『現代秀歌—戦前—』(昭31・12、春秋社))
- (6) 「中河幹子」—久松潜一編集。(『日本文学史—近代—』昭32・6、至文堂)
- (7) 「中河幹子」—「現代女流歌人総まくり」中—坂東二郎筆。(『国文学解釈と鑑賞』—昭和三十五年七月号—(至文堂))
- (8) 「中河幹子」—平野宣紀筆。(『和歌文学大辞典』(昭37・11、明治書院))
- (9) 「中河幹子論」—山英子筆。(『評論集現代歌人百人』(昭37・11、短歌新聞社))
- (10) 「中河幹子」—篠弘筆。(『現代日本文学大事典』(昭40・11、明治書院))
- (11) 「中河幹子」—斎藤正二筆。(『戦後の短歌—現代教養文庫565—』(昭41・7、社会思想社)中、「略歴」(二一八頁—短歌六首(二一頁)短歌三首(三四〇頁))
- (12) 「中河幹子」—生方たつゑ筆。(『短歌をたのしく—作歌と鑑賞—』(昭43・7、主婦の友社)の一九九頁)
- (13) 「中河幹子」—吉例歌人年令調—。(『歌壇新報』(昭43・12・25、歌壇新報社))
- (14) 書評「『ヨーロッパ・アメリカ・日本』—私信より—」—本林勝夫筆。(『をだまき』第四十九卷第一号(昭44・7・

1、をだまき社

- (15) 「中河幹子研究資料Ⅰ—改造社版『短歌研究』登載歌翻刻ならびに資料文献目録—」—荻野恭茂筆。(『岡崎女子短期大学研究報告』第三輯(昭45・3・1))
- (16) 「新萬葉集の頃の中河幹子」—荻野恭茂筆。(『をだまき』第五十三卷第九号(昭47・9・1、をだまき社))
- (17) 「中河幹子」—升本順子筆。(『女流文芸研究』昭48・8、南窓社)
- (18) 「わが師—もう一人の菩薩—として行動的な中河幹子—」—久礼田房子。(昭49・6・10、『短歌新聞』)
- (19) 「悲母の姿をありありと見た—中河幹子歌集『悲母』—」—五島美代子筆。(昭49・10・10『短歌新聞』)
- (20) 「作歌しつづけて五十年—中河幹子さんに紫綬褒章—」—名画にかこまれて静かに語る(昭49・12・10『短歌新聞』)
- (21) 「『悲母』のなかにみる生命感」—長沢美津筆。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (22) 「歌集『悲母』に寄せて」—加藤将之筆。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (23) 「深さと広さ」—相馬雪香。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (24) 「次ぎには『喜母』を」—平野宣紀筆。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (25) 「『悲母』に想う」—阿部静枝。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (26) 「この夏の感動」—保田与重郎筆。(『をだまき』第五十六卷第十号(昭49・10・1、をだまき社))
- (27) 「『悲母』小見」—宮柊二筆。(『をだまき』第五十六卷第十一号(昭49・11・1、をだまき社))
- (28) 「『悲母』の意味」—安田青風。(『をだまき』第五十六卷第十一号(昭49・11・1、をだまき社))
- (29) 「かなしみは」—川口汐子筆。(『をだまき』第五十六卷第十一号(昭49・11・1、をだまき社))
- (30) 「中河幹子」—畑和子筆。(『現代短歌辞典』—『短歌』9月臨時増刊—(昭53・9・15、角川書店))

- (31) 「中河幹子氏の歌業について」——新聞進一筆。(『をだまき』第六十二卷第一号(昭54・1・1、をだまき社))
- (32) 「自伝的自歌自註(1)」——中河幹子筆。(『をだまき』第六十二卷第一号(昭54・1・1、をだまき社))
- (33) 「悲母評——幹子への私信」——故・清水比庵筆。(『をだまき』第六十二卷第二号(昭54・2・1、をだまき社))
- (34) 「悲母」——大悟法進筆。(『をだまき』第六十二卷第二号(昭54・2・1、をだまき社))
- (35) 「夕波」・「悲母」——四宮正貴筆。(『をだまき』第六十二卷第二号(昭54・2・1、をだまき社))
- (36) 「自伝的自歌自註(2)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第二号(昭54・2・1、をだまき社))
- (37) 「自伝的自歌自註(3)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第三号(昭54・3・1、をだまき社))
- (38) 「自伝的自歌自註(4)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第四号(昭54・4・1、をだまき社))
- (39) 「中河幹子の秀歌(1)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第五号(昭54・5・1、をだまき社))
- (40) 「自伝的自歌自註(5)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第五号(昭54・5・1、をだまき社))
- (41) 「中河幹子の秀歌(2)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第六号(昭54・6・1、をだまき社))
- (42) 「自伝的自歌自註(6)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第六号(昭54・6・1、をだまき社))
- (43) 「中河幹子の秀歌(3)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第七号(昭54・7・1、をだまき社))
- (44) 「自伝的自歌自註(7)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第七号(昭54・7・1、をだまき社))
- (45) 「中河幹子の秀歌(4)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第八号(昭54・8・1、をだまき社))
- (46) 「自伝的自歌自註(8)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第八号(昭54・8・1、をだまき社))
- (47) 「自伝的自歌自註(9)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第九号(昭54・9・1、をだまき社))
- (48) 「中河幹子の秀歌(5)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第十号(昭54・10・1、をだまき社))

- (49) 「自伝的自歌自註(10)」——中河幹子。(『をだまき』第六十二卷第十号(昭54・10・1、をだまき社))
- (50) 「中河幹子の秀歌(6)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十二卷第十二号(昭54・12・1、をだまき社))
- (51) 「中河幹子の秀歌(7)」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十三卷第一号(昭55・1・1、をだまき社))
- (52) 「自伝的自歌自註(11)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第一号(昭55・1・1、をだまき社))
- (53) 「自伝的自歌自註(12)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第二号(昭55・2・1、をだまき社))
- (54) 「中河幹子短歌鑑賞Ⅰ——『悲母』抄その(1)——荻野恭茂。(『相山女学園大学研究論集』第11号第2部(昭55・3・1、相山女学園大学))

- (55) 「自伝的自歌自註(13)(15)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第三号(昭55・3・1、をだまき社))
- (56) 「自伝的自歌自註(14)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第四号(昭55・4・1、をだまき社))
- (57) 「自伝的自歌自註(15)(17)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第五号(昭55・5・1、をだまき社))
- (58) 「自伝的自歌自註(16)(18)」——中河幹子。(『をだまき』第六十三卷第六号(昭55・6・1、をだまき社))
- (59) 「中河幹子のヨーロッパ」——荻野恭茂。(『をだまき』第六十三卷第八号(昭55・8・1、をだまき社))

### 三、付・中河幹子主要編著解題

#### 『をだまき』

中河幹子創刊・主宰の短歌雑誌。昭和三年六月十六日第三種郵便認可。大正十二年十月創刊の『いぎやう・GOG』

YO』を前身とする。『ごぎやう』は昭和十九年六月まで。昭和十九年七月（第二十三巻第七号）より『をだまき』と改名し現在に至る。但し、大戦末期、すなわち、昭和十九年七月より昭和二十年一月まで、戦時統制のため三社合併（『紀元』（秋田篤孝）・『歌と評論』（藤川忠治）（坂本小金）・『ごぎやう』（中河幹子））の時期があり、その時期の『をだまき』は、秋田・藤川・坂本・中河の四選者の選という形で運営されていた。

なお、幹子短歌のうちで、歌集に収められたものも、その初出のほとんどがこの『をだまき』誌上であり、いわば氏のホームグラウンドとも言える。

現在、全国のみならず、（沖縄）・ハワイ・台北等の支部をも含め、約六〇〇名の会員を擁する。昭和五十四年、短歌雑誌連盟よりハ優良雑誌として表彰された。

国立国会図書館ならびに立命館大学の白楊荘文庫にかなりのバックナンバーが保存されている。

## 『夕波』

中河幹子の第一歌集。昭和二十七年一月一日、長谷川書房刊。B6版二〇二頁。一頁三首宛、計五二七首所収。昭和十七年から昭和二十五年まで、凡そ制作年代順に配列。作者による後記あり。二〇三頁に正誤表（二ヶ所。正・誤一六七頁、坐、座一八二頁、山塊・山塊）『日本文学年表』（昭54・桜楓社）にも出。筑摩書房版『現代短歌全集』の第十一巻―昭和二十五年―昭和二十七年―に丸本で収載される予定。

終戦前後の時代を背景に、ハ愛Vとハ老Vハ死Vの悩みと、それからの解脱への志向が主たるテーマとされており、作歌技法の面から見ると、アララギ的写生技法から、ハ象徴V的技法完成に至る過渡期の作品が多い。その歌風は、全体として、その名「夕波」の典拠となった歌

いづくまでゆく鴨ならむ夕波の高まる沖に一羽なやめる

のごとくに暗く重くくるしい。

### 『悲母』

中河幹子の第二歌集。昭和四十九年八月一日、短歌新聞社刊。A5版・四七〇頁。美麗函入。函および表紙に、ロー字で、「TheHimo」ともある。題字・清水比庵、表紙絵・サラスヴァティ像、函絵・エドワルドムンク。昭和二十七年より昭和四十七年まで、凡そ制作年代順に配列され、一頁四首宛、計一四四〇首所収。初めに、十八頁にわたる中河与一氏の序文があり、後に、「夫が希望峰を廻り地中海の三ヶ月の船旅に出かける前々日」として、作者自身の「あとがき」がある。『日本文学年表』（昭54・桜楓社）にも出。

集中には、主に、その名「<sup>Himo</sup>悲母」が示すごとく、宗教、特に仏教的精神への憧憬と涵養を奥に秘めて、人を愛し、国を愛し、自然を愛する熱い心が、煩惱の海と彼岸の間をさまよいつつ、世界行脚ののち、目の覚めるようなハイカラな感覚と相俟って、自家薬籠中のものとなった完成度の高い八象徴V技法を駆使しつつ、作者自身の持ち味としての、重厚なリズムで詠みあげられた歌が多い。しかしその歌風は、必ずしも単調ではなく、時に華麗、時に重厚、時に深遠、時に飄逸である。

尚、本集三〇〇部は日を待たず売り切れたため、読者の要望にこたえて、翌年普及版『悲母抄』（昭50・8・20、短歌新聞社）が出版された。（『悲母』より八二一首を自選により抄載）これには、庭内における作者の写真（白黒）と、末尾に作者自身の編になる簡便な「中河幹子年譜」が初めて添えられた。

『ヨーロッパ・アメリカ・日本』

中河幹子著、歌文集。B 6 版三三七頁。昭和四十四年三月一日、白川書院刊。表紙絵ならびに内表紙絵（禧子像）は、藤田嗣治。「ヨーロッパ紀行」（一〇九八頁）、「アメリカ紀行」（一〇六〇一四六頁）、「日本紀行」（一九六〇二七九頁）、「彼との生活」（二八二〇三三五頁）、「あとがき」（三三六〇三三七頁）より成る。「ヨーロッパ紀行」は、昭和三十九年のもので、財団法人・国民協会の新聞『国民協会』に載せられたもの。「アメリカ紀行」は、昭和二十七年のもの、「日本紀行」の時折書かれたもの。「彼との生活」は、夫君・与一氏の『中河与一全集』（角川書店）刊行の際、書肆よりの依頼により、その『月報』に四、五枚ずつ（12回）書いたものである。幹子短歌の成立の背景等を知るための格好の自注書とも言える。

（昭55・8記）